

## いかにして多くの概念が獲得されるか

### —ドゥンス・スコトゥスの認識論—

本間 裕之

#### 1. はじめに

本稿の目的は、スコトゥスの以下のテキストを註釈することにある。

そして一般的に、そのようにして、数においてただ一つである知解作用によって、より少なく共通であるもの同様に、より多く共通であるものが知解される（*QQ. Metaph. VII, q. 19, n. 17*）<sup>1</sup>。

このテーゼ（以下「知解の複数性テーゼ」）は、人間についての例をとって説明すれば、「人間」が認識されると同時に、そこに含まれている「動物」や「生物」なども、ただ一つの知解作用によって知解される」ということである。

しかしながら、数において一である知解作用によって複数の概念が得られるということはあまり自明ではないと思われるうえ、スコトゥス自身もそこでこうしたことがいかにして可能であるのかについては語っていない。また、この理解は一見すると、『オルディナティオ』において可知的形象の要不要を巡る議論の中で異論として措定された「一つの物体が相違する諸々の形によって同時に形作られ得ないように、同じ知性は相違する諸々の対象によって同時に形作られないように思われる（*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 355*）<sup>2</sup>」という、アルガゼルに基づく可知的形象否定論によって反駁され得るように思われる。

そこで本稿は、スコトゥスの認識論において、可知的形象が果たす役割を基礎的な側面から確認し、スコトゥスのいわゆる「共通本性」論を彼の認識論の内に位置付けることで、知解の複数性テーゼがいかにして可能であるのかを理解し、上で引用したテキストを逐語的に註釈することを目指す。

この目的のために、まず第二節ではスコトゥスの共通本性論を、特に認識論と関わる範囲で概観し、続く第三節ではスコトゥスによる可知的形象を擁護する議論、認識において可知的形象が果たす役割を捉える。そして第四節では、共通本性と可知的形象との関わりを見ることで、知解の複数性テーゼの可能性を考察し、

実際に註釈を行う。

## 2. スコトゥスの共通本性論

第二節ではスコトゥスの共通本性についての議論を追う。アヴィケンナに由来する概念である「共通本性」がスコトゥスによって主要なしかたで取り上げられるのは、彼の『オルディナティオ』第二卷第三区分第一部の個体化論においてである。ただし、スコトゥスはこの箇所では認識論に関わるような議論をそれほど多くは行っていない。しかし、以下でも見ることであるが、共通本性は知性の自体的な対象（*Ord. II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 32*）として、認識論においても欠かすことのできない役割を果たしている。そこで、ここでは特に認識論的な観点に重点を置きつつ、スコトゥスの共通本性論を概観しよう。

スコトゥスは、自らの個体化論において、本性が個別的であるためには本性とは別の要因を必要とする、という自身の見解を保持するために、アヴィケンナに由来する共通本性論を導入する。スコトゥスは、アヴィケンナの「馬性は馬性ではない」という有名なテーゼを以下のように理解している。

[本性は] 数的な一性という点で「自らに基づいて一」でもなく、その一性に反対する複数性という点で「複数」でもない。また（何らかのものが知性の対象であるものとしての普遍的なものであるというしかたで）現実態における「普遍的なもの」でも、それ自身で「特殊的なもの」でもない（*Ord. II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 31*）<sup>3</sup>。

本性は、それが「存在する」と言われるときにはこうしたもののいずれかでなければならない。つまり、事物において存在するときには個体化の原理によって個体化され、知性において存在するときには普遍性が伴うのでなければならない。しかしながら本性はそれ自身として、いわゆる「絶対的な本性」としてはそれらに自然本性的に先行しているのである。そうした先行性に基づいて本性の「何であるか」ということは知性の自体的な対象であると言われるのであり、「第一の知解作用」は、「知性の内に」という本性の様態も、「知性の外に」という本性の様態も伴って知解されていない限りでの「本性」に関わる（*Ord. II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 33*）のである<sup>4</sup>。

さて、スコトゥスによって固有なしかたで「普遍的なもの」と言われるのは、

知性においてある本性のことであるが、絶対的な本性もまたある意味で「普遍的なもの」と言われ得る。普遍性を伴った本性が第二志向から派生的に命名される近接的な基体 (*subiectum propinquum*) であるのに対し、絶対的に考察された本性は遠隔的な (*remotus*) 基体として「普遍的なもの」と派生的に命名される (*QQ. Metaph. VII, q. 18, nn. 40-1*)。なぜなら、絶対的な本性は「自らに基づいて〈これ〉ではなく、そしてそのようにして多くのものものについて語られることが、自らに基づいて自ら自身に相反しないからである」(*QQ. Metaph. VII, q. 18, n. 41*)<sup>5</sup>。

認識論的な観点からは、共通本性には以上のような特徴が与えられる。ここで、知性と共通本性との関係を考える上で、以下の二点が問題となるだろう。まず、本性は個別的であるか普遍的であるかの様態を有さない限り実在的には存在しないにもかかわらず、そうした様態を持たない絶対的な本性が認識に関わるとされているのはどういうことか。実在的には存在しないものが対象としての機能を果たすというのはいかなることであるのか。そして、本性が知性において存在し始めるのはいかなるメカニズムによってか。これらの問題は第三節において、スコトウスの可知的形象論を見た後で考察する。

### 3. 可知的形象

#### 3. 1 出発点の整理

スコトウスは『オルディナティオ』第一卷第三区分第三部第一問において、ガンのヘンリクスを中心とする可知的形象否定論者を相手取り、可知的形象の必要性を擁護している。そのヘンリクスの見解は、スコトウスによって以下のように整理される。

可感的形象の刻印が感覚表象へともたらされ、感覚表象の力に至るまでのその進行全体がある場合に、能動知性は感覚表象における対象から抽象し、可能知性を、本質の単純把握へと転換させる。ただしそのようにして、可能知性は感覚表象から何らの刻印された形象も受け取らないし、想像において現前するがゆえにというのでなければ、対象も知性に現前しない (*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 340*)<sup>6</sup>。

これによれば、ヘンリクスは可知的形象を否定し、感覚表象と知性とを直接結びつけて知性認識を考えていた<sup>7</sup>。つまりヘンリクスは、知解作用を引き起こす

ためには感覚表象で十分であると考えていたのである。ヘンリクスによれば、その意味で、可知的形象を措定することは無駄である、ということになる。

スコトゥスはこうした見解に反対して可知的形象の必要性を主張するのであるが、その際の議論の出発点となるのは、知性が普遍的なものを認識するということである。下で引用するテキストが示しているとおおり、雑駁に整理すれば、スコトゥスは「知性は普遍的なものを知解する。それゆえ、その知解に先立って対象があり、可知的形象がある」という推論を正しいものとして理解していたのである。そしてこの推論を擁護するために、能動知性の非質料性や知性の完全性、知性における記憶など、様々な側面から非常に多くの議論を行っている（*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, nn. 348–78*）。スコトゥスの可知的形象論を不足なく論じるためには、それらの議論すべてを取り扱う必要があるだろうが、本稿ではそれを遂行することはできない。そのため、スコトゥス自身がそれらの議論の出発点としている議論と、それに関わるいくつかの議論を参照する。

まずは少し長くなるが、スコトゥスの主張を確認しておこう。

知性は普遍的なものを知解するということから、私は「知性は、自体的に、対象という相のもとで知性自身に現前し、[知性が、]知解するのに自然本性的に先行する、現実態における普遍的な対象を有し得る」という命題を受け取ろう。このことから、企図されたことが帰結する。すなわち、その先行するものにおいて、[知性は、]可知的形象において現前する対象を有するのであり、そのようにして[知性は、知性の]働きに先行する可知的形象を有するのである。採用された前件は十分に明白であると思われる。その理由は以下の通り。対象は[知性の]働きに自然本性的に先行している。それゆえ、[知性の]対象である限りでの対象の固有な条件であるところの普遍性は、知性の働き、ないし知解することの働きに先行する。それゆえ、[普遍性という]その相のもとで、対象は[知性に]現前するのでなければならない。というのも、対象の現前は[知性の]働きに先行するからである（*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, nn. 349–50*）<sup>8</sup>。

ここでのスコトゥスの議論において重要なのは、「知解することに先行する対象は、知性の対象として固有な条件であるところの普遍性という相のもとで知性に現前せねばならない」という点である。つまり、知解作用の対象は普遍的なものであって、それは普遍性という特質を伴っている限りで、第二節の議論におい

てみたとおり<sup>9</sup>、知性において存在するものである<sup>10</sup>。

以上のような認識論的な場面において、知性の対象と言われているものはすべて、第二節におけるスコトゥスの議論から共通本性と理解して差し支えないであろう。しかしながら、第二節では「第一の知解作用」は、「知性の内に」という本性の様態も、「知性の外に」という本性の様態も伴って知解されていない限りでの「本性」に関わる」と言われていたのに対し、ここでは「[普遍性という]その相のもとで、対象は[知性に]現前するのでなければならぬ」と語られており、微妙な齟齬があるように見える。これらのテキストにはらまれているように見える混乱については、第三節第三項において可知的形象の働きを整理していくなかで解消されるであろう。

### 3. 2 諸議論

続いて、「知性が普遍的なものを知解する。それゆえ、その知解に先立って対象があり、可知的形象がある」という推論を擁護するためにスコトゥスが提示している多くの議論を参照しつつ、可知的形象が認識において果たす役割を具体的に記述することを試みよう。

まず、上ですでに述べられたとおり、知性が対象を知解するに際して、対象は普遍的なものとして現前せねばならない。だが、スコトゥスによれば、こうしたことは感覚表象を通じては得られない。なぜなら、「同じものとしてとどまる形象は、表象的な[相異なる]二つの根拠を有さず、また表象され得るものにおける二つの相との関連で表象的なものであるのでもなく、また、普遍的なものという相と単一なものという相のもとで対象を知解することは、表象的な、ないし表象することの二通りの根拠を要求する」ので、同じものに留まりつつ「単一なものという相のもとで対象を表象する感覚表象は、その対象を普遍的なものという相のもとで表象し得ない」(Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 352) からである<sup>11</sup>。それゆえ、感覚表象とは別に、対象を普遍的なものという相のもとで表象する可知的形象が要求されるのである。

このように、感覚表象は単一なもの (singulare) という、普遍性の度合いでいえば最下位のもとを表象するということから、以下のようにも議論される。(以下、第三節第三項の議論のため、便宜上、引用の冒頭に (I) から (IV) までの番号を振る)。

(I) より普遍的でない習態といっそう普遍的な習態とは区別された固有

な習態である。[…]ところで、より普遍的なものを巡る知解することの働きが有されるのは、より普遍的なものがそうした相のもとで知性に現前する場合のみである。したがって、より普遍的なものは、それによって何らかのより普遍的でないものの、知性のもとでの現前があるところのものとは別のものによって知性に現前し得るのである。ところでもし感覚表象において対象が劃然と知解されるとするならば、いっそう普遍的なものは、より普遍的でないものにおいてでなければ[知性に]決して現前しないことになる。というのも、[より普遍的なものは]感覚像から作られ得る単一なものにおいてしか決してあり得ないことになるからである[が、このことには矛盾がある]。したがって云々[より普遍的なものが表象されるためには、感覚表象とは別のものが要求される] (*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 364*)<sup>12</sup>。

普遍的な概念が、普遍性を持たない感覚表象を通じて知性に現前するとすれば、普遍的なものが普遍的でないものによって現前することになり、「より普遍的なものは、それによって何らかのより普遍的でないものの、知性のもとでの現前があるところのものとは別のものによって知性に現前し得る」ということに反する。可知的形象の本性を考察する上で、この議論において重要なのはこの命題であり、これはつまり、「より普遍的なものとより普遍的でないものとが知性に現前するのは、別々の可知的形象を通じてである」ということである。スコトゥスはこのように、「自体的にかつ第一のしかたで知解されるところの任意のものについて、固有な形象がある」(*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 370, adnotatio*)と考えていたのであり<sup>13</sup>、別々の概念ごとにそれぞれ別々の形象を措定していたのである。

さて、続いて可知的形象が知性において原因されるものである、ということを見ていこう。感覚認識から知性認識へ至る順序を追えば、「本性の第一の兆候において、対象は自らにおいて、あるいは感覚表象において能動知性に現前するものであり、そして、そこにおいてそれら[対象]が可能知性に現前するものであるところの本性の第二の兆候において、可能知性において形象が産み出される」(*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 382*)<sup>14</sup>。このとき、能動知性は感覚表象と協働することによって可知的形象を原因する<sup>15</sup>。こうした能動知性の働きを以下のように説明している。

(II) 能動知性は純粹なしかたで能動的な能力である。[…] それゆえ、



〔能動知性は〕 実在的な働きを有し得る。〔ところで〕 すべての実在的な働きは何らかの実在的な終極を有する。〔ところで〕 その実在的な終極は感覚表象においては受け取られない。〔…〕 したがって、〔能動知性の実在的な終極は〕 ただ可能知性においてのみ受け取られる。というのも、能動知性は何も受け取らないからである。〔能動知性によって〕 原因されたその第一のものは、知解することの働きとしては措定され得ない。というのも、「〔能動知性は〕 秩序から秩序へと変転させる」ので、能動知性の働きの第一の終極は現実態における普遍的なものだからである (*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 359*)<sup>16</sup>。

ただしスコトウス自身が「ここでは、感覚表象が能動知性とともにあつたとしても知解作用を原因し得ず、普遍的なものについての知解作用を原因し得るのは、先立って形象を原因する場合のみである、ということは論じられていない」と追記しているとおり、おそらく議論の簡略化のために意図的に可知的形象がこの議論から取り除かれている。他の箇所でも論じられているように、スコトウスの図式においては「可知的形象が可能知性において形相的に原因されることで、同時にそこで抽象的な対象が原因される」 (*QQ. Metaph. VII, q. 18, n. 51*) のであり<sup>17</sup>、ここで語られている「実在的な終極」も、本来的には可知的形象と解されるべきであろう<sup>18</sup>。そしてこのような能動知性の実在的な働きは、知解作用が対象を巡る働きであるということのための前提となる。

その〔可知的形象の〕 産出が措定されないならば、能動知性にはいかなる実在的な働きも与えられ得ず、そしてそのようにして対象を巡るいかなる働きも与えられ得ない。というのも、何らかの実在的な形象のゆえに、というのでなければ働きは決して志向的なしかたではないからである (*QQ. Metaph. VII, q. 18, n. 51*)<sup>19</sup>。

ここでの「対象」という語は、知性に現前する普遍的なものとしての対象とは解し難い。そのように解する限り、「何らかの実在的な形象のゆえに、というのでなければ、働きは決して志向的なしかたではない」という一節、とくに「志向的」ということばを適切に解することが困難であるように思われるからである。

「対象」ということばの理解に関しては、第三節第一項の終わりで見たような問題とも関わっていると思われるので、その混乱の解消を試みる際に再度触れるこ

とにする。

### 3. 3 図式化

以上で行った読解を踏まえながら、対象—知性—可知的形象の関係を図式的に整理したい。可知的形象を通じて知性に現前する普遍的なものとしての対象は、「現実態における普遍的なもの」とも呼ばれ、これは知解することの働きに先行している。つまり、この段階では知解作用は現実には生じてはいないのであり、この状態を、スコトゥスは「対象が知性において対象的なしかたで、習態的な存在を持つ」とか「何らかのものが対象的なしかたで知性において、習態的なしかたである」という（*QQ. Metaph. VII, q. 18, n. 44*）。スコトゥスはこれを第一現実態や付帯的可能態（*potentia accidentalis*）と言い換えている。そしてこの「現実態における普遍的なもの」とは、知性においてある限りでの共通本性であろう。本性はこのようにして知性において存在するようになる。さらに、この現実態における普遍的なものが知性を動かすことで、知解作用が生じる。こうして対象は知性において対象的なしかたで、現実的な存在を持つ。これは第二現実態と同義である。この段階において対象が現実的に知解されているという状況が生じる。

対象が知性において対象的なしかたで習態的な存在を有するまでの段階を、スコトゥスは以下のように取りまとめている。

（Ⅲ）対象は、能力との関連で第一に然々の現前を、すなわち、知解作用の形相的な根拠であるところの然々の形象を知性において産み出し得るために、然々の近接を有する。第二に、〔対象は〕産み出すものの似像であるところの産み出されたその形象を通じて、認識され得るもの、ないしは表象され得るものという相のもとで現前する対象である（*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 382*）<sup>20</sup>。

ここで注目すべきは、明らかに二義的に使われている「対象」という語である<sup>21</sup>。一つ目の「対象」は可知的形象を原因するために、能力との関連で現前するものであり、これは感覚表象においてある対象であると言える。二つ目の「対象」は普遍的なものとして知性に現前する対象である。この二つの用法を踏まえつつ、以下のテキストを確認しよう。

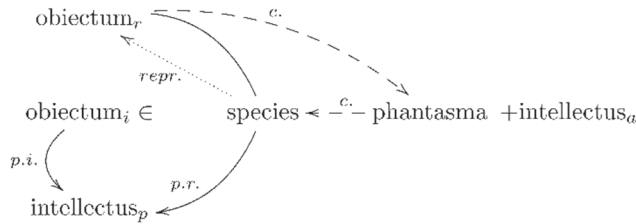
（Ⅳ）知性は、然々の実在的な形象を刻印する実在的な対象から実在的なしかたで受動するのみならず、形象において光を放つものとしての対象から



も、志向的な受動という点で受動する。そしてこの第二の受動は「知解作用の受容」である。そしてこの受容は、可知的形象において光を放つ、可知的なものとしての可知的なものからのものである (*Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 386*)<sup>22</sup>。

「実在的な対象」とは、(III)における一つ目の対象であり、「形象において光を放つものとしての対象」が二つ目の対象にあたる。知性は、これら二つの対象から、実在的なしかたと志向的なしかたという二通りのしかたで受動する。実在的な受動は、すでに見たように、知性の働きが(実在的な)対象を巡るものである、ということを保証する。他方で志向的な受動は「知解作用の受容」ともいわれているように、知性における(普遍的なものとしての)対象が知性を第二現実態へと動かすものである。スコトゥスによれば、知解作用においてはこのように二通りの受動が必要とされるのである。(I)から(IV)までのテキストを併せて理解することで、下の図のような構図を描くことができるであろう。

上の図について説明しよう。repr.を伴う点線矢印は表象関係を表し、可知的形象が実在的な対象を表象することを意味する(I)。また、c.を伴った破線矢印は



原因関係を表し、実在的な対象 *obiectum<sub>r</sub>* が感覚表象を原因し、それを伴う能動知性 *intellectus<sub>a</sub>* が可知的形象を原因する(II)。その可知的形象において(≡)知性に現前する対象 *obiectum<sub>i</sub>* があり、その対象は可能知性 *intellectus<sub>p</sub>* に志向的な仕方を受動される(III)。また *obiectum<sub>r</sub>* は可知的形象を通じて可能知性に受動される(IV)。それら二つの受動は p.i. と p.r. を伴った実線矢印によって表される。

この図において、*obiectum<sub>i</sub>* はすでに見たとおり知性においてある普遍的なものである。他方で、*obiectum<sub>r</sub>* について、スコトゥスは管見の限りでは明確なことを述べていないが、知性における普遍的な本性をそのうちに有する形象が表象するならば、その本性と同じ「何であるか」を有するものであることが要請されるように思われる。また、スコトゥスが「何らかのしかたで自らに基づいて未規定である本性と協働する能動知性は、第一の[習態的な]存在に基づいて、可能知性における対象を作る総体的な原因」(*QQ. Metaph. VII, q. 18, n. 48*)であるというこの一節と併せて考えれば<sup>23</sup>、*obiectum<sub>r</sub>* が絶対的な本性であると解釈することも許されるのではないだろうか<sup>24</sup>。

このように、*obiectum*<sub>i</sub> を知性における本性として、*obiectum*<sub>r</sub> を絶対的な本性であると理解することで、第二節末尾において提出された二つの問題は解決される。第一に、本性は、普遍性や個別性といった様態を伴ってでなければ存在しないにも関わらず、それが知性の対象になるのは、図から明らかなおり、絶対的な本性が形象によって表象され、知性がそれを実在的に受動する限りにおいてである。また第二に、本性が知性において存在するのは、絶対的な本性を表象する可知的形象を通じてである。そのような可知的形象を通じて、知性において普遍的なものとしての本性が原因されるのである。そして第三節第一項の終わりで取り上げられた「対象」という語に見られる混乱ないし多義性も、最終的には絶対的な本性と知性における本性との間の差異に回収されることになる。

#### 4. 共通本性と認識

ここまでで、スコトゥスの認識論の基本的な部分を、対象—知性—形象という関係に関わる限りで整理した。この整理に基づいて、当初の目的であった知解の複数性テーゼの註釈に取り掛かる。

まず本性の構造について考察する。スコトゥス自身、管見の限りではそれほど明示的ではないと思われるが、本性そのものにおいて一種の構造を認めている。それはポルピュリオスの木のような構造であり、本性においては形相や形相的な完全性がその「枝」を構成する<sup>25</sup>。本性はそうした枝を自らにおいて含んでいる。こうした構造に基づいて以下のように語られている。

自然本性的な先行性に基づいて [本性の] 「何であるかということ」は自体的に知性の対象である。[...] そして「第一のしかたで真である」諸々の命題は、このように受け取られた何性によって真である。というのも、何性について「第一のしかたで自体的に」語られるところのものは、自然本性的に何性よりも後であるところのものものすべてから何性が抽象される限りで、何性において本質的に含まれているところのものに他ならないからである (*Ord.* II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 32) <sup>26</sup>。

ここでは、本性が一や多、普遍的なもの、個別的なものすべてに自然本性的に先行しているというしかたで、本性の何性が知性の自体的な対象であると述べられ、その本性の何性について論じられる。その何性は、アリストテレスの例を

借りれば<sup>27</sup>、「三角形にとって線がある」というような第一のしかたで自体的な命題を真にするものであり、本性の何性にはそのようにして本質的にポルピュリオスの木のような構造が含まれていると言える。

知性認識の対象になるのは、これまでの議論を取りまとめれば、このように、そのうちに本質的に様々な（形相や形相的な完全性という）情報を含んでいる絶対的な本性である。こうした諸々の情報という側面のもとで、本性が能動知性と協働して知性において、その種々の情報の側面における可知的形象を原因し、そうしてそれらの側面に対応する普遍的な対象が知性において習態的なしかたで原因されるのである。

ここにいたり、知解の複数性テーゼのパラフレーズを可能にする註釈が施される。それは以下のとおり。

〈註釈〉

「数においてただ一つの知解作用によって」ということは、「能動知性が共通本性と協働し、原因として働くという、数において一度の働きで」ということであり、「より少なく共通であるもの同様、より多く共通であるものが知解される」ということは、「実在的な対象 *objectum*<sub>1</sub> に含まれている種々の情報に対応する固有な可知的形象が知性において原因され、それに伴ってそれらの可知的形象に固有な普遍的なものとしての対象 *objectum*<sub>2</sub> が原因される」ということである。ただし、ここで「知解される」といっても、それは第二現実態的な意味での「知解作用」ではなく、むしろ第一現実態的な意味で理解されねばならず、「知性においてある本性が、知性において対象的なしかたで習態的な存在を有する」と解されねばならない。そのように解する限りで、アルガゼルの考えているように、知性が同時に別々の形象によって形作られているということはないだろう。

## 5. おわりに

以上で、スコトウスの認識論において、可知的形象と共通本性とが果たしている役割を概観し、目的であった知解の複数性テーゼの註釈が完了した。それは、スコトウスの可知的形象擁護の議論において提示している諸概念を図式的に整理し、その中に共通本性を位置付けることによってはじめて可能になるものであった。つまり、スコトウスの認識論を対象—知性—形象という側面からではなく、本性—形象という側面から見ることによってのみ達成されるものである。認識論において、形而上学的な、と形容して差し支えない共通本性論を補助線にして考

察することは、以上の註釈に留まらない意義を持つように思われる。それは特に、第二節においてみたように、絶対的な本性がある意味では「普遍的なもの」とも呼ばれ得るということに関わる。

普遍的なものは事物においてあると確証される。そうでなければ、以下のことごとが生じる。普遍的なものものについて何らかのことごとを知ることに  
おいて、私たちが知るのは、所持物についてでは決してなく、むしろただ私  
たちの概念についてのみであることになろう (*QQ. Metaph. VII, q. 18, nn. 58-9*)<sup>28</sup>。

このようにスコトゥスが語り、私たちの認識が事物に関わるということを保証しようとしていることは注目に値する。というのも、認識論的な文脈で「実在的な受動」と呼ばれていた事態は、形而上学的ないし真理論的な文脈においては、「事物と知性とにおいて同じ本性が存在する」という事態から、より明確なしかたで語りなおされるからである。本性に基づく説明によって、いかにして実在的で、何が受動されているのか、ということがいっそう容易に見て取られることであろう。知性の内に本性があることは可知的形象による、という本稿における成果に基づくならば、スコトゥスにとって「認識は事物に関わる」という素朴とも言い得る直観は、可知的形象を認めることによって救われることになる。

また、本稿で扱われたような認識は、概念獲得という点で、スコトゥスによれば論理学の端緒として位置付けられる。以上のように、「認識が実在に関わる」ということが可知的形象を認めることによって得られるならば、単純把握に後続する諸々の論理的な操作もすべて、実在的な概念を基礎として展開されるであろう。この場合、可知的形象を認めるスコラ学者の、とりわけここではスコトゥスの論理学の特色として、そのような実在的な側面を取り出すことができるであろうし、それを他の、可知的形象を認めないスコラ学者、たとえばオッカムなどの論理学と比較する際の拠り所の一つを提供することができるであろう。

※本研究は JSPS 科研費 18J14369 の助成を受けたものである。

<sup>1</sup> “et generaliter, ita unica intellectione numero intelligitur magis commune sicut minus commune.” これと同じ指摘が *Ord. I, d. 3, p. 1, q. 2, n. 35* に見られる。

<sup>2</sup> “Sicut unum corpus non potest figurari simul diversis figuris, ita non videtur idem intellectus posse figurari simul diversis obiectis.”

<sup>3</sup> “non est ‘ex se una’ unitate numerali, nec ‘plures’ pluralitate opposita illi unitati; nec ‘universalis’ actu est (eo modo quo aliquid est universale ut est obiectum intellectus), nec est ‘particularis’ de se.”

<sup>4</sup> “Prima ergo intellectio est ‘naturae’ ut non cointelligitur aliquis modus, neque qui est eius in intellectu, neque qui est eius extra intellectum.” 本性が知性において存在する際、それには普遍性が伴うが、普遍性は知解することの様態 (modus intelligendi) であり、その様態そのものは知解されていない。Cf. *Ord. II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 33*.

<sup>5</sup> “quia non est ex se haec, et ita non repugnat sibi ex se dici de multis.”

<sup>6</sup> “habita impressione speciei sensibilis in organum sensus, et toto illo processu usque ad virtutem phantasticam, intellectus agens abstrahit ab obiecto in phantasmate, et immutat intellectum possibilem ad simplicem apprehensione essentiae, ita tamen quod intellectus possibilis nullam speciem impressam recipit a phantasmate, nec est obiectum praesens intellectui nisi quia praesens in imaginatione.”

<sup>7</sup> 可知的形象を否定するこの議論が可能であるのは、感覚において、感覚器官も媒介も、質料性という共通の特質規定を有しており、かつ可感的形象は、感覚が感覚作用を受け入れることへの近接的な態勢である一方で、知性は器官的な働きではなく、しかもそれ自身で知解することの働きへと態勢付けられているからである、とスコトゥスによって説明される。つまり、この立場によれば可知的形象は、媒介としての役割を果たす上では、感覚のように媒介と受容者とが同じ特質規定に属していないがゆえに不適切であるし、知性はそれ自身で知解作用へと態勢付けられているがゆえに不必要である、という二点から否定されるのである。Cf. *Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, n. 341*. これに対するスコトゥスの解答については、cf. *Ord. I, d. 3, p. 3, q. 1, nn. 388–97*. ヘンリクスに反対するスコトゥスの議論は Spruit [1994], 257–66 に簡潔に纏まっている。

<sup>8</sup> “Ex hoc [...] quod intellectus potest intelligere universale, accipio hanc propositionem: ‘intellectus potest habere obiectum actu universale, per se sibi praesens in ratione obiecti, prius naturaliter quam intelligat.’ Ex hoc sequitur propositum, quod in illo priore habet obiectum praesens in specie intelligibili, et ita habet speciem intelligibilem priorem actu. Antecedens assumptum videtur satis manifestum, quia obiectum est prius naturaliter actu: ergo universalitas, quae est propria condicio obiecti in quantum obiectum, praecedit actum intellectus vel intelligendi; ergo sub illa ratione etiam oportet obiectum esse praesens, quia praesentia obiecti praecedit actum.”

<sup>9</sup> 厳密には、第二節で見たのは「共通本性が知性において存在するならば、それは普遍性を伴っている」という形式であるが、事物においては普遍的なものは存在しない (*Ord. II, d. 3, p. 1, q. 1, n. 37*) ということから、逆、すなわち「本性が普遍的であるならば、それは知性においてある」ということも主張可能であろう。

<sup>10</sup> スコトゥス自身は、知解作用の直接的な対象が「対象的なしかたで」(objective) 知性においてあるという。「対象的なしかたで」知性においてあるということの解釈に関する論争は Pini [2015] によって整理されている。本稿ではさしあたりその論争には介入しない。

<sup>11</sup> “eadem species manens, non habet duas rationes representativas, nec est representativa respectu duarum rationum in representabili. Sed intelligere obiectum sub ratione universalis et singularis requirit duplicem rationem representativam vel representandi [...] ergo phantasma, quod de se representat obiectum sub ratione singularis, non potest representare ipsum sub ratione universalis.”

<sup>12</sup> “habitus minus universalis et magis universalis sunt distincti habitus proprii [...] sed non habetur actus intelligendi circa universalis, nisi ipsum sub talis ratione sit praesens intellectui; ergo universalis potest esse praesenti alicuius minus universalis: sed si praecise intelligeretur obiectum in phantasmate, numquam esset magis universale praesens nisi minus universali, quia numquam nisi in singulari phantasiabili, — ergo etc.” なお、後に明らかにされるように、ここでの「習態」は可知的形象を通じて得られる普遍的な概念と同一視される。

<sup>13</sup> “Cuiuslibet quod per se et primo intelligitur, est propria species. :”

<sup>14</sup> “in primo signo naturae est obiectum in se vel in phantasmate praesens intellectui agenti, in secundo signo naturae — in quo ista sunt praesentia intellectui possibili, ut agentia passo — gignitur species in intellectu possibili.” なおここで用いられている *signum naturae* という表現は、Knuuttila [2017] や Duba [2017] によれば、ガンのヘンリクスにおいて既に使われていたもので、自然学をはじめとする諸議論において、量的に分割され得ない一瞬間を二つの観念的部分に分割して考察する際に用いられていた。

<sup>15</sup> *QQ. Metaph. VII, q. 18, n. 51*.

<sup>16</sup> “intellectus agens est mere potentia active [...] ergo potest habere actionem realem. Omnis actio realis habet aliquam terminum realem. Ille terminus realis non recipitur in phantasmate [...] ergo tantum recipitur in intellectu possibili, quia intellectus agens nullius est receptivus. Illud primum causatum non potest poni actus intelligendi, quia primus terminus actionis intellectus agentis est universale in actu.”

<sup>17</sup> “qua [= species] causata in intellectu possibili formaliter, simul causatur obiectum abstractum ibi.” [] は引用者による補足。



<sup>18</sup> 可知的形象が実在的なもの(特にCrossの言い方を借りて言えば、実在的で志向的なものReal)であるということは、Cross [2014], 100 で主張されていることである。

<sup>19</sup> “Nisi enim ponatur ista gignitio, nulla actio realis potest dari intellectui agenti, et ita nec aliqua circa obiectum, quia illa numquam est intentionaliter nisi propter aliquam realem.”

<sup>20</sup> “obiectum respectu potentiae primo habet praesentiam realem, videlicet approximationem talem ut possit gignere talem speciem in intellectu, quae est ratio formalis intellectionis; secundo, per illam speciem gignitam, quae est imago gignentis, est obiectum praesens sub ratione cognoscibilis seu repraesentati.”

<sup>21</sup> ただし、「対象」という語が二義的に用いられていることと、実際に二通りの対象が存在していることはひとまず区別されねばならない。そのうえで、「対象」という語の二義性に対応する対象の存在様態があるか否か、ということ、対象が知性において「対象的なしかたで」存在を有するというをどのように理解するかに関わる問題である。註10を参照。

<sup>22</sup> “intellectus non tantum patitur realiter ab obiecto reali, imprimente talem speciem realem, sed etiam ab illo obiecto ut relucet in specie patitur passione intentionaliter: et illa secunda passio est ‘receptio intellectionis’ — quae est ab intelligibili in quantum intelligibile.”

<sup>23</sup> “Intellectus [...] agens, concurrens cum natura aliquo modo indeterminata ex se, est causa integra factiva obiecti in intellectu possibili secundum esse primum.”

<sup>24</sup> Cf. *QQ. de anima*, q. 17, n. 16.

<sup>25</sup> Cf. *QQ. Metaph.* VII, q. 19, n. 67. またこうした構造を認めているように読める言明に関しては、*Ord. II*, d. 3 p. 1, q. 6, nn. 176–81 を参照。

<sup>26</sup> “et secundum prioritatem naturalem est ‘quod quid est’ per se obiectum intellectus, et per se [...] ; et propositiones ‘verae primo modo’ sunt verae ratione quiditatis sic acceptae, quia nihil dicitur ‘per se primo modo’ de quiditate nisi quod includitur in ea essentialiter, in quantum ipsa abstrahitur ab omnibus istis, quae sunt posteriora naturaliter ipsa.”

<sup>27</sup> Aristotle [1949], 73a35.

<sup>28</sup> “illud quod universale, est in re. Confirmatur: aliter in sciendo aliqua de universalibus, nihil sciremus de rebus sed tantum de conceptibus nostris.”

#### [凡例]

ドゥンス・スコトゥスの著作は以下から引用する。

Duns Scotus, Johannes. 1950-2013. *Doctor subtilis et Mariani Ioannis Duns Scoti opera omnia*, 21 vols., studio et cura commissionis scotisticae ad fidem codicum edita, praeside P.C. Balić, Roma, (Vat.).

———. 1997–2006 *Opera Philosophica*, 5 vols., Girard J. Etzkorn et al. (eds.), N.Y., The Franciscan Institute of St. Bonaventure University, (OPh.).

また、引用に際しては以下の略号を用いる。

*Ord.*: *Ordinatio*.

*QQ. Metaph.*: *Quaestiones super libros Metaphysicorum Aristotelis*.

なお、原文を引用する際に用いた /: / という記号は、スコトゥス自身による追記を示すものである。

#### [文献表]

Aristotle. 1949. *Aristotle’s Prior and Posterior Analytics*, W.D. Ross (ed.), Clarendon Press.

Cross, Richard. 2014. *Duns Scotus’s Theory of Cognition*, Oxford University Press.

Duba, William O. 2017. “Quasi-Aristotelians and Proto-Scotists”, *Vivarium*, 2017, 60–84.

Knuutila, Simo. 2017. “Change and Contradiction in Henry of Ghent”, *Vivarium*, 2017, 22–35.

Pini, Giorgio. 2015. “Scotus on Objective Being”, *Documenti e studi sulla tradizione filosofica medievale*, 26, 2015, 337–367.

Spruit, Leen. 1994. *Species Intelligibilis: From Perception to Knowledge. 1. Classical Roots and Medieval Discussions*, 1994, Brill.